

第 37 回電気通信普及財団賞 表彰者コメント ～テレコム人文学・社会科学学生賞～

<順不同>

※括弧内の所属は当論文賞受賞時のものです。

矢倉 大夢 氏（筑波大学大学院理工情報生命学術院 博士後期課程 1 年）

テレコム人文学・社会科学学生賞 奨励賞

「No More Handshaking: How have COVID-19 pushed the expansion of computer-mediated communication in Japanese idol culture?」



この度は、「第 37 回電気通信普及財団賞テレコム人文学・社会科学学生賞」に奨励賞としてお選びいただき、大変光栄に存じます。審査に携わられた先生方、そして貴財団に深く御礼申し上げますと共に、本研究にご協力いただいたすべての方に改めて感謝の意を表したいと思います。

本研究は、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) によって日本のアイドルグループの握手会にどのような変化が生まれ、その中で ICT 技術がどのように用いられていたかを分析し、論じたものです。このテーマに取り組むきっかけとなったのは、様々なアイドルグループがニューノーマルに対応しようと試行錯誤している様子を、たまたま Web 上で見かけたことです。このような予期せぬ変化の中で生まれた特殊なユースケースというのは他にないだろうし、それを情報通信の観点に紐付けようとする人はいないだろうということで、半ば使命感のようなものから調査を始めました。

これまでは主に技術開発を志向したテーマに取り組んできた身としては、研究としてまとめる上で不勉強な点も多く、苦心した部分もありました。しかし、この度「人文学・社会科学学生賞」という枠組みの中で、本研究が奨励に資すると判断いただいたとのことで、非常に大きな励みになりました。

引き続き、情報社会の進展に資するような技術開発、およびその社会実装の両面に邁進していく所存でございます。学生個人の功績を鑑み、激励の要素を含めて審査いただいたということで、この評価にお応えできるよう努めて参りたいと存じます。

高木 美南 氏

テレコム人文学・社会科学学生賞 奨励賞

「法とアーキテクチャによる非マッチング型プラットフォーム規制の在り方」



この度は、「第 37 回電気通信普及財団賞テレコム人文学・社会科学学生賞 奨励賞」という素晴らしい賞をいただきまして、大変光栄に思います。電気通信普及財団の皆様、ご審査いただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

本稿は、デジタルプラットフォームの中でも、不特定多数の利用者間の情報を媒介する非マッチング型プラットフォームの規制の在り方を、「法」と「アーキテクチャ」の観点から検討したものです。具体的には、非マッチング型プラットフォームにおけるプライバシー権侵害や著作権侵害、フェイクニュース、データ独占などの問題を取り上げ、現状の規制を類型化しています。そして、規制手段として一般的な「法による規制」と、デジタル空間において構築の余地が大きい「アーキテクチャによる規制」に焦点を当て、両者の関係性を考察し、適切な規制方を提案しています。

今後もデジタル空間は、ますます社会経済活動と密接に結びつくことが予想されますが、そうした社会動向を的確に捉え、人々のより豊かな生活につながる検討ができるよう、励んで参りたいと思います。

今回の受賞は、卒業研究の指導教員である麻生典先生をはじめ、ご支援いただきました皆様のお力添え

がなくては成しえなかったものです。皆様に心より感謝申し上げます。

最後になりますが、貴財団の一層のご繁栄を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

倪 少文氏（筑波大学大学院システム情報工学研究科 博士後期課程 3年）

テレコム人文学・社会科学学生賞 奨励賞

「Collaborative consumption in China: An empirical investigation of its antecedents and consequences」



この度は、「第 37 回電気通信普及財団賞テレコム人文学・社会科学学生賞 奨励賞」という栄えある賞を賜り大変光栄に存じます。電気通信普及財団の皆様ならびに審査いただいた先生方に心よりお礼申し上げます。

今回賞をいただいた論文では、中国人を対象として、脱所有志向、グワンシ主義、物質主義、新奇志向、節約志向が、コラボ消費 (collaborative consumption) に対する一般的な態度に有意な正の影響を与えることを明らかにしました。また、グワンシ主義がコラボ消費への態度との関連は、脱所有志向によって媒介されることも明らかになりました。さらに、コラボ消費に対する一般的な態度は、シェア自転車、シェアカー、シェアグッズ、相乗りサービス、民泊という具体的な形態のコラボ消費の利用意向に正の影響を与えることがわかり、コラボ消費の利用意図が利用頻度に対する強い影響を与えているのは、シェア自転車と相乗りサービスのみであることがわかりました。本論文は中国におけるコラボ消費に焦点を当ててきたが、今後は得られた成果を活かして、日本を含めて国際比較研究を行う予定です。これからの IT 技術で作られていくメタバースと呼ばれるバーチャル社会の理論構築に貢献し、より良い未来社会の実現に一層の努力を尽くすと考えています。

最後になりますが、貴財団の益々のご発展とご繁栄を心よりお祈り申し上げます。